

他力

―位職便り―

【四馬（しめ）のたとえ】

今年（今年）は午年（うまねん）です。
さてある時、お釈迦（しやくか）さまは
こんな説法（せっぽう）をされました。



「世（よ）の中には四種類（ししゆるい）の良馬（りやうま）がいるのだ。

最初の馬（うま）はとても賢（さとし）く、鞭（むち）の影（かげ）をみただけで反応（はんおう）し、乗り手（のりて）の思い通り（おもいどおり）に動く。

二番目（にばんめ）の馬（うま）は影（かげ）だけでは無理（むり）だが、尻尾（しっぽ）に触（ふ）れると、すばやく動き（うご）きます。

三番目（さんばんめ）の馬（うま）は、触（ふ）ただけでは動（うご）かない。だから鞭（むち）で尻（しっぽ）を打（う）つ。すると動（うご）きます。

そして最後（さいご）の馬（うま）だが、鞭（むち）でも動（うご）かない。そこで鉄錐（てつし）で身体（からだ）を刺（さ）すと痛（いた）いので動（うご）く。何を（なに）たとえて（たと）えているか分（わ）かるかい？

最初の馬（うま）は、自分（自分）と無関係（むげんけい）な人（ひと）の苦（くる）しみや葬儀（そうぎ）を見（み）ただけで、わが苦（くる）しみと（と）うけとめられ、「この悲（かな）しみの本（ほん）当（とう）の解決（けっけつ）は何（なに）か」と、仏（ぶつ）の話を（話を）聞（き）こうとする人（ひと）のこと。

二番目（にばんめ）の馬（うま）は、近所（きんじよ）や親戚（しんせき）、友人（ゆうじん）の苦（くる）しみや葬儀（そうぎ）にふれ、それをわが事（こと）と（と）うけとめ、命（いのち）の行く末（すま）は何（なに）かと、聞法（もんぽう）を始（は）める人（ひと）。

三番目（さんばんめ）の馬（うま）は、両親（りやうしん）や伴侶（はんりよ）、子（こ）といった、最愛（さいあい）の人（ひと）の苦（くる）しみや葬儀（そうぎ）を縁（ゆかり）として、「私（わたし）を本（ほん）当（とう）に支（た）えるものは何（なに）か」と聞法（もんぽう）する人（ひと）。そして最後（さいご）の馬（うま）は、自ら（みづか）ら病（びやう）気（き）とな（な）った時（とき）、いよいよ「何（なに）の為（ため）の人生（じんせい）か」と聞法（もんぽう）を始（は）める人（ひと）。

世（よ）の中にはこの四種類（ししゆるい）の人（ひと）がいるのだ。人生（じんせい）には多（おほ）くの別（わか）れの悲（かな）しみがあ（あ）ります。けれどもそれ（それ）らの悲（かな）しみを縁（ゆかり）として、人（ひと）は仏教（ぶつぎやう）にであ（あ）います。本（ほん）当（とう）の幸（さい）せ、悲（かな）しみ・苦（くる）しみの解決（けっけつ）を求（もと）めるのです。



【他力の馬】

第十二号（平成二十六年一月）
専徳寺住職 弘中満雄
ところで浄土真宗（じやうとしんしゆ）は、「如来（にょらい）所以（しゆい）興（きやう）出世（しゆつせ）唯説（ゆいせつ）弥陀（みた）本願（ほんがん）海（かい）（お釈迦（しやくか）さまがこの世（よ）に出（い）て最も説（せつ）きたかつた事（こと）は、弥陀（みた）の本願（ほんがん）のおみ（み）のりです」（正信偈（しやうしんげ））という教（きやう）えです。

法蔵菩薩（ほふさうぼさつ）（のちの阿弥陀仏（あみだぶつ））は五劫（ごこく）という時間（じかん）をかけて悩（なや）まれました。なぜ悩（なや）んだか。この私（わたし）が良馬（りやうま）ではなかつたからです。

たとえ錐（し）で刺（さ）したとしても動（うご）かない悪馬（あくま）がいました。すなわち、自分（自分）が病（びやう）気で辛（くる）くても、頭（あたま）に浮（う）かぶ事（こと）は「はやく治（ち）りたい。死（し）にたくない」ばかり。いつ（いつ）こ（こ）うに人生（じんせい）の意味（い）味（み）に目（め）を向（む）けようとし（し）ない私（わたし）でした。

……目を向（む）けても足（あし）が動（うご）がないのです。もし足（あし）が動（うご）いたとしても動（うご）くだけ。乗り手（のりて）（仏（ぶつ）さま）の指（さし）示（し）（修行（じゆぎやう））通り（どおり）には無理（むり）です。結局（けつこく）、仏（ぶつ）に背（せ）を向（む）け通（とほ）しの私（わたし）なのです。

そんな私（わたし）をどうしたらよ（よ）いか。法蔵菩薩（ほふさうぼさつ）は悩（なや）んだ末（すま）に決（けつ）心（しん）されました。「動（うご）けないなら、こ（こ）ちらが動（うご）こう」と。それが本願（ほんがん）。鞭（むち）や錐（し）を捨（す）てました。そして永劫（えいこく）という苦勞（くるらう）の末（すま）、南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）という名（な）の仏（ぶつ）に。仏（ぶつ）さまの方（かた）が馬（うま）とな（な）ってくだ（くだ）さいました。何も（なに）わ（わ）か（か）ら（ら）ない乗り手（のりて）の私（わたし）。馬（うま）の仏（ぶつ）さまの方（かた）が承（うけ）知（ち）して（して）いて、すたすた歩（あ）いていきます。私（わたし）は何（なに）もしません。逆（さか）に鞭（むち）を入（い）れるなんて、も（も）つ（つ）てのほ（ほ）か（か）です。

浄土真宗（じやうとしんしゆ）という他力（たから）の法（ほふ）で生（な）きる人（ひと）は、毎日（まいにち）が仏（ぶつ）の馬（うま）に乗（の）った生活（せいかつ）ともい（い）えます。決（けつ）して私（わたし）を落（お）とさない馬（うま）とのであ（あ）いを喜（よろこ）び、本（ほん）年（ねん）もお念（ねん）仏（ぶつ）申（ま）す一年（いちねん）とさ（さ）せて頂（たま）います。

